

FONDATION LOUIS VUITTON

GERHARD RICHTER

EXHIBITION
17 OCT. 2025 – 2 MAR. 2026

Press Kit

Book on fondationlouisvuitton.fr and fnac.com #FondationLouisVuitton #GerhardRichter
Fondation Louis Vuitton, 8 avenue du Mahatma Gandhi, Bois de Boulogne, 75116 Paris

Press release Tokyo, 16 oct. 2025

Exhibition

GERHARD RICHTER

2025.10.17 — 2026.03.07

アートの概念を更新しつづける美術史上最高峰のアーティスト、ゲルハルト・リヒター。フォンダシオン ルイ・ヴィトン 史上最大規模の単独回顧展、2025 年 10 月 17 日から開催。

2025 年 10 月 17 日から 2026 年 3 月 2 日にかけて、フォンダシオン ルイ・ヴィトンは、1932 年にドレスデンに生まれ、現代美術界で屈指の影響力を誇るアーティスト、ゲルハルト・リヒターの大規模回顧展を開催します。1961 年、リヒターは東ドイツを逃れ、西ドイツのデュッセルドルフへと渡ったのち、ケルンに定住し、現在も同地で暮らしながら創作を続けています。

20 世紀および 21 世紀美術を代表する巨匠たち——ジャン＝ミシェル・バスキア、ジョアン・ミッチェル、マーク・ロスコ、デイヴィッド・ホックニー——の画期的な単独回顧展を経て、フォンダシオン ルイ・ヴィトンは、同世代でもっとも重要であり、国際的な名声を博するアーティスト、ゲルハルト・リヒターに未だかつてない規模のスペースを捧げます。

2014 年に開催されたフォンダシオン ルイ・ヴィトン開館記念展では、当館が所蔵するリヒター作品を紹介しました。そしてこのたびは、リヒターの芸術的歩みを称えるべく、1962 年から 2025 年までに制作された油彩画、ガラスおよびスチールの彫刻、鉛筆とインクによるドローイング、水彩画、オーバーペインテッド・フォトグラフなど、計 275 点の作品によって構成される、規模・年代ともに前例のない単独回顧展を開催します。本展はまた、展覧会として初めて、ゲルハルト・リヒターの 60 年以上におよぶ創作活動の全貌を紹介する試みでもあります。

リヒターは常に、題材そのものと、表現形式としての絵画そのもの——彼がその境界を絶えず押し広げ、いかなる様式にも分類されることを拒んできた実験の領域——の双方に惹かれてきました。ドレスデン美術アカデミーでの研鑽は、静物画・肖像画・風景画・歴史画といった伝統的ジャンルとの対峙をリヒターに促しました。これらのジャンルを同時代的な視点から再解釈しようとする彼の欲求こそが、本展の核心をなしています。リヒターは、題材を問わず、自然や眼前の光景をそのまま描くことは決してありません。すべてのイメージは、写真や素描といったミディアムを通して濾過され、新たな文脈を生み出す作品として再構築されます。その過程において彼は、筆、パレットナイフ、スキージーなどを用い、ペインティングという領域の内部で驚くほど多様なジャンルと技法を探索し続けてきました。

本展は、1962 年からリヒターがペインティングから離れる決断を下した 2017 年までの意義深い作品群を中心に、以後も続く創造の軌跡を網羅的に紹介します。およそ 10 年をひとつのセクションとして、初期の写真を基にした作品から後年の抽象絵画に至るまで、断絶と連続によって形成されたリヒターのキャリアを貫く絵画的ヴィジョンの展開を、年代順にたどります。

展示概要



Gerhard Richter, *Tisch [Table]*, 1962 (CR 1)

Oil on Canvas, 90,2 x 113 cm

Private Collection

Photo credit: Jennifer Bornstein

© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gallery 1: 1962-1970 Painting after photographs.

ゲルハルト・リヒターは1932年、ドレスデンに生まれた。第二次世界大戦中、家族はルサティア地方のヴァルターズドルフへ移り住む。1951年、リヒターはドレスデン美術アカデミーに入学し、そこでマリアンネ（エマ）・オイフィンガーと出会い、1957年に結婚した。1956年、卒業制作としてドレスデンのドイツ衛生博物館に壁画「Lebensfreude（生きる喜び）」を制作。奨学金を得て、さらに3年間アカデミーに在籍した。1959年にはカッセルで開催された第2回ドクメンタに足を運び、この経験が東ドイツからの脱出を決意させる契機となった。

1961年2月、ベルリンの壁建設の直前に、リヒターとエマは西ベルリンへ脱出し、デュッセルドルフに定住する。リヒターは同地の美術アカデミー（クンストアカデミー）に入学し、1965年まで在籍した。この時期、彼はアンフォルメルに触発された絵画を制作し、1962年に展示するが、後にそれらをすべて破棄している。同年、初めて雑誌の写真をもとにした作品を制作し、以後は家族写真を含むさまざまな資料からモチーフを選んでいた。数年のうちに、リヒターは「現実の再現」を問い直す絵画や、擬古ロマン主義的な風景画など、作品領域を拡張していく。

1964年には初めて自らのアトリエを構え、ミュンヘンのフリードリヒ+ダーレム、デュッセルドルフのシュメラ、ベルリンのルネ・ブロックといったギャラリーで作品を発表を始める。1966年には、娘バベッテ（ベティ）が誕生した。



Gerhard Richter, *Onkel Rudi [Uncle Rudi]*, 1965 (CR 85)

Oil on Canvas, 87 x 50 cm

Collection Lidice Memorial, Czech Republic

Photo credit: Richard Schmidt

© Gerhard Richter 2025 (18102025)



Gerhard Richter, *Verkündigung nach Tizian*
[Annunciation after Titian], 1973 (CR 343-1)

Oil on Canvas, 125 x 200 cm

Hirshhorn Museum and Sculpture Garden,
Smithsonian Institution, Washington, DC, Joseph H.

Hirshhorn Purchase Fund, 1994
© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gallery 2: 1971-1975 Questioning representation.

1970年代は、リヒターにとってもうひとつの創造的な十年であった。この時期、彼は「絵画とは何か」という問いを、相反する複数の作品群のなかで精緻化し、可視化していった。《イン・ペインティングス》では、写真をもとにした作品と対をなす、もうひとつの系列を生み出している。1972年、第36回ヴェネツィア・ビエンナーレにドイツ館の単独の代表に推挙され、リヒターは特定の空間を想定した絵画連作を構想する機会を得た。古典様式のパヴィリオン中央室のために制作された連作《48人の肖像》である。ヴェネツィア滞在から着想を得て、リヒターはティツィアーノの《受胎告知》に基づく一連の作品を制作した。そのモチーフは、描き進められるごとに徐々に解体されていく。その後、1974年には、具象および抽象のあらゆる絵画的理念を否定するかのように、灰色の絵画のみで構成された初の展覧会を開催した。同時に、大型の《カラーチャート》において、偶然性のプロセスを自らの制作のなかに導入している。

1970年、リヒターはパレルモとともにニューヨークに赴き、同世代の重要なアーティストたちと交流した。翌1971年には、デュッセルドルフのクンストハレで自身の作品を総覧的に紹介する展覧会を開催し、母校である同市立美術アカデミーの絵画教授に任命され、1994年まで在職した。1972年にはグリーンランドに赴き、この旅で撮影した写真が、十年後、氷山を主題とする絵画制作を促す記憶としてリヒターを触発することになる。



Gerhard Richter, *Lilak [Lilas]*, 1982 (494)

Oil on Canvas, 2 parts, 260 x 200 cm (each)

Fondation Louis Vuitton, Paris
Photo credit: Primae / Louis Bourjac
© Gerhard Richter 2025 (18102025)



Gerhard Richter, *Kerze [Candle]*, 1982 (CR 511-1)

Oil on Canvas, 95 x 90 cm

Collection Institut d'art contemporain, Villeurbanne/Rhône-Alpes

Villeurbanne/Rhône-Alpes
Hirshhorn Purchase Fund, 1994
© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gallery 4: 1976–1986 Exploring abstraction.

1976 年、ゲルハルト・リヒターは初の大型抽象画《コンストラクション》を制作した。この作品は、1980 年代における彼の創作を特徴づけることとなる大規模な抽象絵画群の前奏となるもので、これらはアイントホーフェンとロンドンで初めて公開された。同時期には、リヒターの絵画に焦点を当てた初の国際的回顧展が開催され、1977 年にはパリのボンピドゥー・センターでも展示が行われている。1978 年、リヒターはカナダ・ハリファックスのノバスコシア美術デザイン大学に招聘教授として赴任し、そこで自身の作品を批判的に検証する新たな制作方法を展開した。1986 年には、デュッセルドルフ、ベルリン、ベルン、ウィーンを巡回する回顧展が開催され、その際に、リヒターの絵画と彫刻を網羅する初のカタログ・レゾネが刊行された。この時期、リヒターは水彩画の制作において新たな創作領域を見出し、小型ながら精緻に構成された作品群を生み出した。これらはシュトゥットガルト州立美術館で展示されている。

また同年、リヒターは彫刻家イザ・ゲンツケンと出会い、1982 年に結婚。翌年にはケルン郊外の住居兼アトリエに移り住んだ。ここでの 10 年間をとおして、リヒターは抽象画のみならず、髑髏や燭台といった伝統的モチーフによる静物画、そして多数の風景画を制作している。



Gerhard Richter, *Gegenüberstellung 2* [Confrontation 2], 1988 (CR 671-2)

Oil on Canvas, 112 x 102 cm

The Museum of Modern Art, New York. The Sidney and Harriet Janis Collection, gift of Philip Johnson, and acquired through the Lillie P. Bliss Bequest (all by exchange); Enid A. Haupt Fund; Nina and Gordon Bunshaft Bequest Fund; and gift of Emily Rauh Pulitzer, 1995
© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gallery 5: 1987–1995 Sombre reflections.

1980年代後半、リヒターは再び複数パネルによる作品構想へと立ち戻った。1988年には、近年のドイツ史における論争的テーマを扱った連作《1977年10月18日》を制作している。この作品群はドイツ国内で強い反響を呼び、初めにクレーフェルトとフランクフルト・アム・マインで展示された。同時期に制作された静謐な風景画や、娘ベティを描いた私的で内省的な肖像画《ベティ》は、先の連作と対をなしている。リヒターが絵画そのものを自己批判的に検証していたことは、彼のノートやインタビューにも明確に示されており、それらは1993年に書籍『テキスト』として刊行された。

北米では、リヒターの作品に対する関心がいっそう高まり、1988年にはトロント、シカゴ、ワシントンD.C.、サンフランシスコを巡回する展覧会が開催された。1995年、ニューヨーク近代美術館は《1977年10月18日》の全てを収蔵した。同時期、ヨーロッパにおいてもリヒターは、具象と抽象という二つの絵画的潮流をひとつの画業に統合した世代を代表する画家として認められていた。しかしリヒターは、たとえば対立を超越するカラーミラーのような作品によって、常に周囲を驚かせ続けた。

《読む女》の肖像は、リヒターの人生における転機を告げるものである。1995年、彼はザビーネ・モリッツと結婚し、同年に息子モーリッツが誕生した。リヒターはこの出来事を、連作《子供を連れたS》において主題化している。



Gerhard Richter, *Gudrun*, 1987 (CR 633)

Oil on Canvas, 250 x 250 cm

Fondation Louis Vuitton, Paris
Photo credit: Primac / Louis Bourjac
© Gerhard Richter 2025 (18102025)



Gerhard Richter, 9.3.08 Grauwald, 2008

Lacquer on photograph, 12,5 x 18.5 cm

Fondation Louis Vuitton, Paris

Photo credit: Primac / Louis Bourjac

© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gallery 6: 1983-2008 On Paper.

リヒターにとって、ドローイングは制御されたプロセスには組み込めない制作の手段であり、即興的なドローイングはペインティングの対極をなしている。1980年代に入ると、リヒターは複数のドローイングに取り組み、1999年に制作された45枚から成るシリーズで締めくくられた。これらの作品は、同年、ヴィンタートゥール美術館で開催されたドローイング回顧展において初めて公開された。

即興の落書かのように生まれた線のフォルムが、構造化され、ほかされた表面や想像上の風景へと発展している。強い示唆力をもつ一方で、リヒターにとってドローイングとは、直接的な記述を可能にする小さなフォーマットの内での営みである。

ドローイングと並行して、リヒターは鮮やかな色彩の水彩画を手がけた。意図的な構成と制御不能な偶然とのあいだを往還する自発的な行為——のちにペインティングでも展開されるこの方法——は、この時期にすでに実践されていた。こうした試みは1990年代には散発的にしか続けられなかったが、やがて紙や写真の上に油彩を施す作品へと発展していく。オーバーペインテッド・フォトグラフでは、写真によるイメージと絵具という物質との関係——形態や色彩の呼応、あるいはそのずれ——が主題となる。スナップ写真がもつ私的で内向的な性格は、絵具の塗布によって中和され、写真と絵画の境界が静かに攪乱されている。



Gerhard Richter, *Lesende [Reader]*, 1994 (CR804)

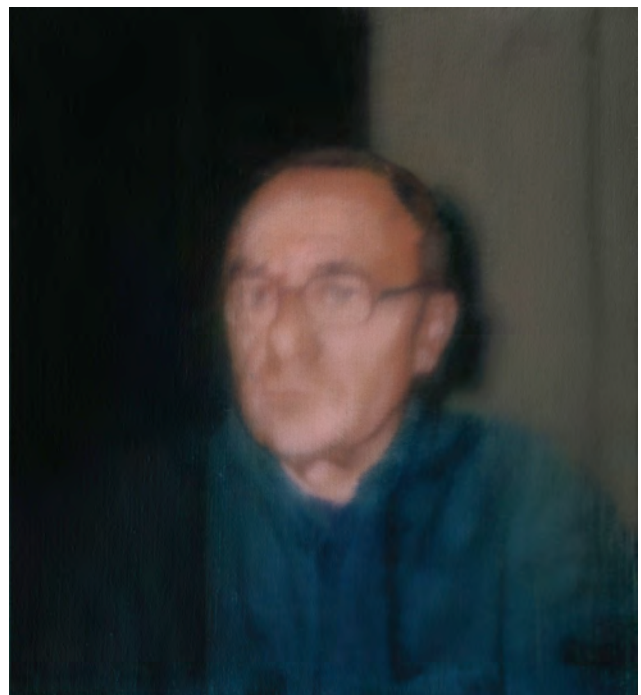
Oil on Canvas, 72 x 102 cm

Collection San Francisco Museum of Modern Art
Purchase through the gifts of Mimi and Peter Haas
and Helen and Charles Schwab, and the Accessions
Committee Fund: Barbara and Gerson Bakar, Collec-
tors Forum, Evelyn D. Haas, Elaine McKeon, Byron R.
Meyer, Modern Art Council, Christine and Michael
Murray, Nancy and Steven Oliver, Leanne B. Roberts,
Madeleine H. Russell, Danielle and Brooks Walker, Jr.,
Phyllis C. Wattis, and Pat and Bill Wilson
© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gallery 7: 1992-1999 — Moments of reflection.

1996 年、リヒターの娘エラ・マリアが誕生し、新たな家族の存在が彼の人生に新たな推進力をもたらした。一家はケルン郊外のハーンヴァルトに新しい住居兼アトリエを構え、リヒターは複数の作品群を同時に進めるため、ケルン中心部のアトリエも引き続き維持した。この時期、リヒターはひとつの抽象画ではなく、構造と調性によって特徴づけられた連作に取り組んでいた。こうした力強い作品群と並行して、リヒターは写真をもとに描かれた私的で内政的な絵画も制作しており、その中には自身初のセルフポートレートも含まれている。日常の中に見出された目立たないモチーフから、リヒターは現実に対する憂あるまなざしを示唆するメタファーを生みだしている。

この時期、リヒターには数々の栄誉が相次いだ。1997 年、第 47 回ヴェネツィア・ビエンナーレにおいて金獅子賞を受賞し、同年には東京で絵画部門の高松宮殿下記念世界文化賞を受賞している。1999 年には、ベルリンの国会議事堂のために記念碑的作品《黒・赤・金》を制作した。この 10 年の集大成となったのが、2002 年、リヒターの 70 歳の誕生日にニューヨーク近代美術館で開催された回顧展〈フォーティ・イヤーズ・オブ・ペインティング〉であり、その展覧会はシカゴ、サンフランシスコ、ワシントン D.C. へと巡回した。



Gerhard Richter, *Selbstportrait [Self-Portrait]*, 1996 (CR 836-1)

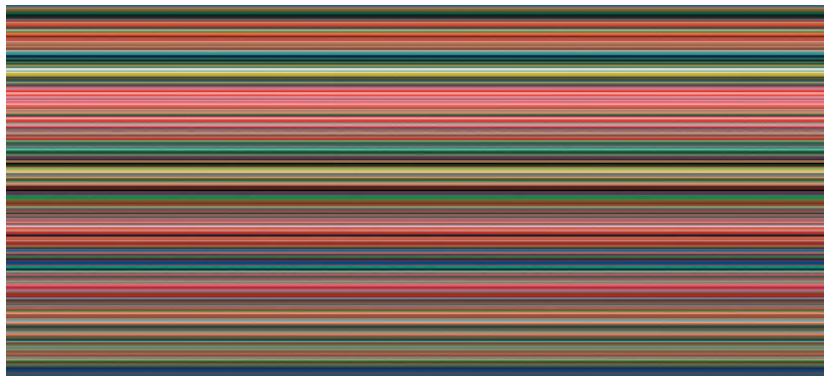
Oil on linen, 51 x 46 cm

The Museum of Modern Art, New York. Gift of Jo Carole
and Ronald S. Lauder and Committee on Painting
and Sculpture Funds, 1996
© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gerhard Richter, *Strip*, 2011 (CR 921-2)

Digital print on paper between
aluminium and Perspex (Diasac),
200 x 440 cm

Fondation Louis Vuitton, Paris
Photo credit: Primac / Louis Bourjac
© Gerhard Richter 2025 (18102025)



Gallery 9: 2001-2013 New perspectives in painting.

2002 年、リヒターはケルン大聖堂南翼のステンドグラス窓の設計を依頼され、それが彼に新たな試みへの着想をもたらした。《ジリカート》《ケージ》の連作を描いたのち、彼はガラスという素材を用いた制作へと移行する。リヒターは、自身が構想しながらも、いわゆる画家としてではなく作品制作に携わるようになる。2007 年に除幕された《ケルン大聖堂の窓》では、72 色を 1 万余の 9.6cm 角のピクセルに配置するために、偶然のプロセスを生みだすべくコンピューターの乱数プログラムを用いた。

2006 年、息子テオドルが誕生。以後、娘エラとテオドルの肖像画を制作している。また、白を基調とする抽象絵画群で、絵画的沈黙にアプローチした。その後リヒターは、ガラス作品に加え、デジタルプロセスに基づく作品——偶然性が中心的な役割を果たす《ストリップ》——のコンセプトを探求し、数年間にわたりペインティングから離れていた。

同じく 2006 年、ドレスデン美術館群内のアルベルティスムにリヒター作品の資料と研究を担う拠点として、ゲルハルト・リヒター・アーカイヴが開設された。2011 年から 2012 年にかけては、ロンドンを皮切りに、ベルリン、パリを巡回する大規模な回顧展が開催された。

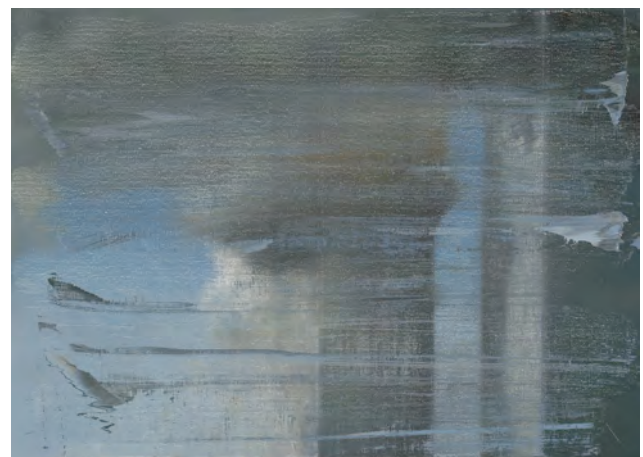


Gerhard Richter, *Cage (6)*, 2006 (CR 897-6)

Oil on Canvas, 300 x 300 cm

Private Collection

© Gerhard Richter 2025 (18102025)



Gerhard Richter, *September [September]*, 2005 (CR 891-5)

Oil on Canvas, 52 x 72 cm

The Museum of Modern Art, New York.

Gift of the artist and Joe Hage, 2008

© Gerhard Richter 2025 (18102025)



Gerhard Richter, *Birkenau*, 2014

Oil on Canvas, 260 x 200 cm each

Neue Nationalgalerie, Stiftung Preußischer Kulturbesitz, Berlin,
loan from Gerhard Richter Art Foundation

Photo: David Brandt, courtesy Gerhard Richter Archive Dresden
© Gerhard Richter 2025 (18102025)

Gallery 10: 2014-2017 — Pictorial elegies.

数年間の中断を経て、リヒターは2014年にペインティングを再開した。その際に彼が最初に取り組んだ主題は、ドイツの過去であった。長年にわたり、彼はホロコーストを題材とする作品の制作を試みてきたが、その圧倒的な感情を適切に表現する手段を見いだせずにいた。《ビルケナウ》の連作は、アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所で収容者によって撮影された現存する唯一の写真群を出発点としている。最終的にこの作品群は、四点の抽象絵画として完成された。これらの作品はまずドイツで、ついでイギリスで、そして2020年にニューヨークのメトロポリタン美術館で開催されたリヒターの回顧展で展示された。《ビルケナウ》の写真版は、ベルリンの国会議事堂およびアウシュビッツ・ビルケナウ記念館に恒久展示されている。

2016年には、ベルリンとドレスデンにおける主要作品群の恒久展示を目的として、ゲルハルト・リヒター財団が設立された。2015年から2017年にかけて、リヒターはその表現力によって観る者を魅了する一連の抽象絵画を制作した。その後、再び沈黙を経て、彼は、自らの画業を完結した、と宣言した。



Gerhard Richter, 26 Zeichnungen [26 Drawings], 2023

Solvent, graphite, and crayon on paper

14.9 x 20.6 cm (each)

Fondation Louis Vuitton, Paris

Photo credit: Primae / Louis Bourjac

© Gerhard Richter 2025 (18102025)

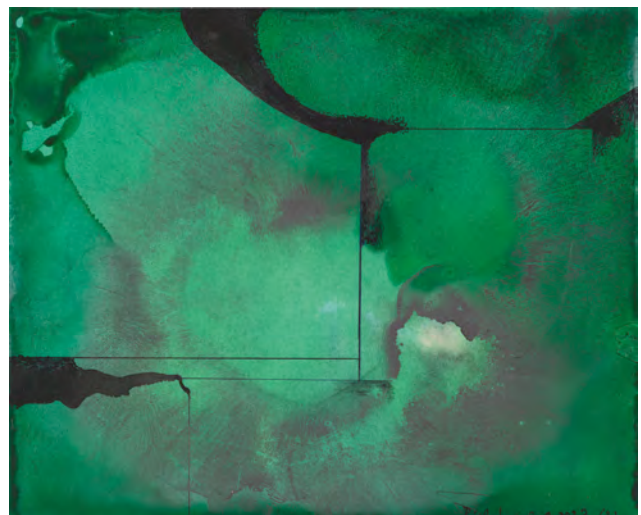
Gallery 11: 2017-2025 — Continuing to work.

リヒターは、自らの画業は完結した、と宣言して以来、ドローイングとパブリック・スペースのための作品制作に専念している。2016年には、日本の豊島に《豊島のための14枚のガラス、無益に捧げる》を設置したパヴィリオンが完成した。続いて2018年には、ミュンスターのドミニカ教会において《振り子のための2組の灰色の合わせ鏡》を発表。さらに2025年には、ノーマン・フォスター設計によるニューヨークの建築内に、二点の大型レリーフが設置される予定である。

壁面に向かって制作する代わりに、リヒターはいま、机上での制作に動んでいる。それぞれのドローイングには日付が記されており、その創作過程をたどることができる。それらは連続的に発展するのではなく、数日から数週間のあいだに小さなまとまりとして生まれる。

これら新しい紙上の作品においてリヒターは、メディウムとしてのドローイングの力学と可能性を探索している。線描、フロッタージュ、トーンなどを用い、ときに独自の技法にも実験的に取り組んでいる。意識を超えた手の動きが、これまでにない重要な位置を占めている。ときおり彩色インクを用い、リヒターはそれを遊び心をもって紙上に滴らせる。偶然に生まれた形象に応えながら、定規やコンパスなどの器具を用いて再び線を引く。

ゲルハルト・リヒターは、現在もケルンで生活し、創作を続けている。



Gerhard Richter, 3.8.2023 (2), 2023

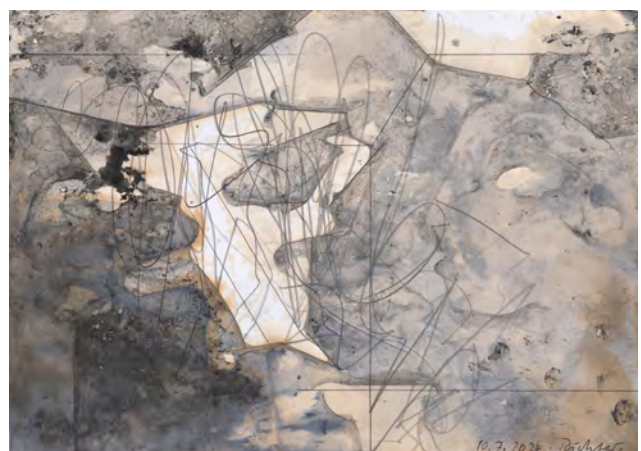
Solvent, graphite, and crayon on paper

21.6 x 25.9 cm

Private collection

Photo: Georgios Michaloudis, farbanalyse, Köln

© Gerhard Richter 2025 (18102025)



Gerhard Richter, 10.7.2024, 2024

Solvent, graphite, and crayon on paper

21 x 29.7 cm

Private collection

Photo credit: Georgios Michaloudis, farbanalyse, Köln

© Gerhard Richter 2025 (18102025)

FONDATION LOUIS VUITTON

FONDATION LOUIS VUITTON

Bernard Arnault *President, Administrator*

Jean-Paul Claverie *Advisor to the President*

Suzanne Pagé *Artistic Director*

Sophie Durrleman *Executive Director*

Curatorial team

ARTISTIC DIRECTOR

Suzanne Pagé

GUEST CURATORS

Dieter Schwarz and Nicholas Serota

COORDINATION

Ludovic Delalande
with Magdalena Gemra

Press contacts

Fondation Louis Vuitton

Sébastien Bizet *Director of Communication*

Caroline Cadinot *Press and Public Relations Officer*

Joonam Partners

Roya Nasser: + 33 (0)6 20 26 33 28

Pierre-Edouard Moutin : +33 (0)6 26 35 51 57

fondationlouisvuitton@joonampartners.com

For JP press

afumi inc.

佐藤ビンゴ : Bingo Sato

info@afumi.co.jp

03-6451-1568